
あっちとこっち

ゆさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あつちとこつち

【Nコード】

N5546Y

【作者名】

ゆき

【あらすじ】

職業、高校二年生。

私の日課は、叔父夫婦が経営する旅館の朝食準備や仲居さんの補助、その他お手伝い。

ある日、時間ぎりぎりまで旅館にいた私は、遅刻から逃れるべく自転車を全力でこいでいた。

学校はすぐそこ、セーフだと思った束の間、森の中で迷子になっていた。

森い！？

木漏れ日差すところから空を見上げれば、葉っぱの影に隠れて何か巨大な物が飛んでいた。

あれって、飛行機だよ。そうだよ、きっと。だれかそうだってよー！！ 二度にわたって異世界に潜り込んだ女子高校生と、ここがお前が産まれた世界だと主張し花嫁になれと強要する竜の話。

*警告タグは、念のためという意思表示。

この小説を読む前に

この小説の書き方についての説明です。

私はこの小説を書くにあたり、『敢えて』というものを多用しています。

敢えて書いた、敢えて書いていない、敢えて説明した、敢えて説明しない、色々です。

何故こうしているのかというと、完全に主人公視点で作品を仕上げようと思っっているからです。

鍵括弧内の文は、会話を示しています。

鍵括弧以外の文は、すべて「私」の五感で体感した事、心情を書いています。

ご指摘頂いた『擬音』は、読む側に取っては『擬音』でしかありませんが、主人公には『音』です。

耳から聞こえてくる『音』という『情報』です。

文として【乗り物の駆動音】と書けば簡単ですが、これでは「私」に何の情報をもたらしていません。

上記は一例であって、他にもご指摘を受ける事が出てくると思いますが、こういったものを否定されると、この作品が書けなくなってしまうです。

とはいうものの、一度書いたものは最後まで書き上げたいです。

読む・読まないは、読み手さんの好みだと思うので何も言いませんが、上記の事を念頭に置いてほしいです。

宜しく願います。

【登場人物】（前書き）

主人公紹介。

【登場人物】

私

性別： 女

容姿： 黒髪長髪（二つに分けてお下げ）
整った顔立ちで、美人に分類される。
モデルのようなスレンダー体型

職業1： 高校生

竜人

職業2： 実家手伝い

花嫁

家族構成： 叔父夫妻

父母とは、産まれて間もなく死別。

嫌い： 特撮ヒーロー戦隊の様な、『正義は勝つ』な性格の人間。
（テレビで観賞する分なら良いが、現実では関わりたくない）

奇麗事を並べるだけの聖女のような性格の人間。
（酸いも甘いもを理解している聖女なら、受け入れる）

好き： 食べること
身体を動かすこと
暖かい場所

特技： 武道全般
炊事・裁縫

花道など、上流階級っぽい習い事全般。
車輛運転全般（法律は守るものなので、非常時以外は助

手席)

特殊能力を少々

他 : 婚約者がいる

非常に困った時だけ力押し

条理と不条理

私が思うに、世の中不思議なことがいっぱいあると思う。

どしゃ降りの雨の中を傘を差さずに歩いて帰ろうが走って帰ろうが、服が含んだ水分量はあまり変わらない、とか。

くしゅん。

昨日に濡れた水分量と今日濡れた水分量は違うのに、からなず風邪を引くとか。

二日も濡れれば、風邪引くか。全然不思議じゃなかった。

私を感じるに、世の中理不尽なことがたくさんあると思う。

二ヶ月に及ぶ極貧生活を抜けて、お気に入りの喫茶店でコーヒーを頼んだら、いつの間にか値上げされていたこと、とか。

ささやかなご褒美だったのに。

道路の真ん中をふらふら歩く小学生に自転車のベルを鳴らしたら、

「うぜえ、うぜえ」と言われたこと、とか。

ああいうのが大人になるって、こわい。

あと、それから、学校への道を自転車で全力疾走していたら、いつの間にか見渡すかぎり巨木の生い茂る森に迷い込んでいたこと、とか。

ええ、そりゃもう、現在進行形で。

わけわかんない。

チリチリン。

敷かれたレールが歩いた後の道か

屋久島も びっくりだよね 大自然

一句詠んでみた。じゃあ、戻ろうかな。まだ後を振り返ってないけど、きつと通勤途中の人達がいるはずだ。迷い込んだのは、私だけではないはずだ。

よし、振り返ろう。でも、ちょっと怖いから目を閉じた。それから、自転車のハンドルを回して反転する。

さあ、きつとこの先に、進んできた道があるはずだ。

すーはーすーはー。深呼吸して、どくどくと緊張の鼓動を打つ心臓を落ち着かせて、目を開けば……。

森
だ
っ
た。

進むべき道は背後、振り返る道は前方。

歩いた後に道ができる、って言ったのは誰だ？

少なくとも、私が歩いてきた日常は崩れ去ったように思う。

だって、毎日通っていた町並みが消えているんだもの。目の前にあるのは、ただぼっかりと口を開いた薄暗い獣道。

これだって、獣道といえるのか。雑草が地面を隠しているけど、灌木の類はない。花もなければ、実をみのらせそうな植物もないみたい。

あるのは、私の身長を遥かに凌ぐ巨木だけだ。

この木って、何メートルあるのかな。地上十メートル？ 日本一高い山ぐらい？

うーん、そんなにはないか。都会の高層建築ぐらい？ まあ、とにかく大きいんだろうな。

地面を這う草に、幹が太く高すぎて葉っぱが見えない樹木。サバイバル生活には不向きな森。

ああ、私ってすごく落ち着いているよね、多分。こんな状況になったら、普通の人ならパニックだよ。帰ることができたら、小父さん達にに感謝しなくちゃ。

よし、とりあえずは自転車のハンドルを学校がある方角へと戻そう。それから、スタンドで固定して。

がしよがしよがしよ。

ペダルを踏みしめ、チェーンと後輪を回転させる音。
なんか音楽かからないかな。無音って寂しいよ。

最適なお供は、乗り物がエアポンプか食べ物か。

がしよがしよがしよがしよ。

前屈みになってハンドルに頬杖をついて、ひたすらごくよ。どこまでも。

地面とにらめっこ。泣いたら負けよ？ 気分的に。

にらめっこしましよ、あつぷつぷ。

おおっ！？ よくよく見れば、この獣道には轍っぽい溝があるじゃないですか！

ということは、なにか車輪がある乗り物が通るのね。車輪があるということとは、それなりに発展した文化や技術があるかも。

じゃあ、じゃあ、ここで頑張っていたら、誰かしら通るかもっ。

ううん、私は今、自転車というものに乗っている。通るかも分らない誰かを待つ必要なんてないんじゃない？

自分で進めば良いのよ！

そうとなれば問題は、どっちに進むかね。知らない土地だし、どっちに進んでも同じよね。ええと、そうね、自転車から降りよう。

轍と轍に沿って縦線と横線を描こう、爪先で。

ずりずり ざざっ ずりずり ざっ

線の先に『ハンドル』『左』『にだい』『右』と書いて出来上がり。ハンドルと左は前進で、荷台と右は後退よ。

うん、よし。せっかくだから、定番の歌も歌おう。

あみだ あみだ どれにしてもあみだくじー わたしが線引いて選んであみだくじー

得するの も 後悔するの も わたしだけえー ああ あみだくじい

ぐう〜

きまり！

全力前進あるのみ！！

お腹がなる音が聞こえたけど、きっと気のせいよ。

きゅる〜

さ、行くわよ。

えいえいおー！

木製か金属製か

つづくよー つづけよー いつまでもどこまでもー ちりんちりん

なんて、寂しいから歌っているけど、体力温存を考えたら無口で自転車こぎたい。

あみだくじで決めた結果、学校へ通う道程をずっと真直ぐ進んでいる。もしかしたら学校が見えてくるかもしれないし。この轍を辿れば、人里があるかもだし。

ああ、きつとこつという切ない気持ち、淡い恋心、というんだろう。私、今ちよつとだけ人肌恋しい。

実家が旅館経営しているから、つねにお客様や仲居さんに囲まれているし、一人暮らしというものが想像し難いの。

人、何所かに人いないかな。第一森人を発見、って大声に出して言いたいよ。

帰れないとしても、誰かと仲良くなって、お裾分けしたりされたり良なお近所関係を築きたい。

ん、お？ よーし、木漏れ日はっけーん。急いで急いで自転車よ。

到着。ああ、あったかい。良かった、太陽はあるのね。葉っぱの間から見える空と太陽は、すごく遠くに感じるのよ。見上げていると首が疲れるから、思い切って寝転んでみよう。制服に土がつくなんて気にしない。

ふふ、ひなたぼっこ最高。あ、こつちのお家は縁側があるのかな？

日本茶は？ お米とかお味噌とかお塩とか、さしすせそ。
ぐう。

ぞぞぞ

ふあ〜。

あ、しまった。つい寝入ってしまったわ。
今何時かしら。あと、この音はなに？

ぞぞぞぞぞ

いまなにか巨大な影が横切っていなかった？

あ、ほらっまた！

あの影、何かしら？ 飛行機、だったら良いな。

あれが文明機器だったら、ここは日本だ。いや、日本でなくても地球上のどこかだ。

あー、ちよつと高いところに昇りたくなってきた。でも、この木つて、タマゴ肌も驚きのツルツル肌だから、引っ掛かりがないのよね。葉っぱの先の空を見たいよ。

ふいふいおーん

あ、また変な音がした。今度はなに？

でもこれは、上からではなくて、木々の間から聞こえているみたいね。

なんとなく金属音の感じがするわ。それで、けっこうスピードが出せるのかな、近づいているみたい。

此処は様子見しほうが絶対いいわね。

自転車のハンドルを左に切って、数本先に生える巨木の裏側に隠れた。

電車かバスか戦車か。

ふいふいおーん

ぷしゅ〜

がしょん

で、電車？ 乗り物よね？

バスかしら、キャタピラがあるし。

でも、やっぱり電車かな。左右両方に運転席が設けられているみたいだし。

中の様子は窺えない。側面に窓がないから。

運転席はどうなっているんだろう。私でも運転できるかしら。自動車っぽい運転席を希望。

ううん、この際細かい事は気にしない。ただ変な乗り物、これ決定。

特徴その一、キャタピラ。

車高が見上げるほど高いから、それにともなって高く長いのは理解できる。だけど、キャタピラ自体の幅は細い。これが、轍の正体なのか。重力でへし折れそう。

特徴その二、トゲトゲしたもの。

車体の周りに浮かぶ半透明のトゲトゲしたもの。あれは実体があるのかな、ぐるぐると回転している。車体の防御用か攻撃用かな。鋭く尖っていて、指されたら痛そう。

がたがた

ばしんっ

あ、搭乗員登場。

三人だけかしら。運転席に一人残し、二人が梯子を使って降りてきた。

「おい、居る様子があるか？」

「いや、分らない。騎車の音に驚いて、逃げてしまったのかもしれない」

「だけど、徒歩なら、そう遠くまで行っていないよな。殿下が発見された時は、倒れていたと仰っていたし」

「ああ。この辺を重点的に探そう」

倒れていた？ 私のことかしら。それなら寝ていただけです、とは言わない。

今は彼らが通り過ぎるまで、お腹の虫が鳴くのを、お腹に力を込めて止めるだけです。物音を立ててはいけません。

ピルルルル

「！」

「!？」

「なんの音だ？」

うどわうっ!？

け、携帯電話っ。嫌っ、止まって止まって!

っっていうか、電波よ、何故にあるの!

道具入れか飛び道具か。

そ、そういえば携帯電話の存在を忘れていたわ。

原始的な風景も相まって、圏外だと思ったのよ。お願いだから、鳴り止んで。私、ピンチ！

かばん、かばんっ。ああどうしよう。かばんを振っても、呼び出し音が止まらない。

ああ、もうっ！！
せいっ。

「つぶ！！」

顔面直撃ヒットだぜ。

……………。

きゃー、お弁当、料理長！ 勢い余って鞆を投げてしまったわ！

「大丈夫か？」

「……、気絶したみたいだ。出血していないから、大丈夫だろう」

「慎重に行けよ」

「ああ」

そろりそろり、草を踏みながらこっちに来る気配がする。

どうしよう。ああああ、もう一人のしちやっだから、二人も三人も変わらないっ、多分！

力押しよ、力押し！ そうよ、私の得意分野じゃない。

「ぐほっ」

「！？ おいつ」

腰を落として低姿勢で素早く潜り込み、二人目の鳩尾に肘鉄っ。

ついで、一人目の顔に鎮座している鞆を掬い上げ、運転席目掛け全力投球。

「ぐふっ」

よし、命中！

嫌あゝ、料理長にお裾分けしてもらったお弁当があー。食べ物を粗末に扱ってごめんなさいっ。

急いで運転席に上って鞆を拾い上げる。

あとは退却あるのみ。

いや、エンジンを切って行こうかなっ。しかし、グズグズはしていいられない。うん、放置だ放置。

自転車に乗って。道、道はどっちだ。もう、どっちでもいいや。轍から離れたところを通って、来た道を戻ろう。時間を稼がなくては全力疾走よ。タイヤさん、道なき道を行くけどパンクに耐えてね！

あ、携帯電話。まだなってる。しかし、私を危険に晒した張本人だ。このままシラを切るのもいいかも。誰かは知らぬが、私の怒りを思い知れ。

ピ

「もしもし？」

『漸くでしたか。どこをほっつき歩いているのです？ 下らない反抗期などすぐに止めて、家に帰りなさい』

「……………、反抗期ばんざい」

『貴女は馬鹿ですか。とにかく一度、樋口小父上に顔をお見せなさい。一週間も行方不明になっているのですよ』

「誰がですか？」

『貴女に決っているでしょう』

はいいい？

今朝か七日後か

『どうかしましたか』

「一週間つて、ほんとう？ 私いま、浦島タロ子？」

『浦島太郎です』

「やだなあ、秋君。私でもそんなの知っているよ。だけど、私は女の子。だから、タロ子」

『知っていますか？ 鳥類は三歩歩くと、直前の出来事を忘れるそうです。雉並みの頭脳しか持てないのですか』

「雉は、桃太郎！」

『……貴女にとって、今はいつぐらいですか』

「九日の、んー、十時三十分くらい？」

『そうですか。しかし、今日は十六日で、時間は十一時二十七分です』

「そう、なんだ」

秋君が、私を騙してもなんの得にもならないから、本当に一週間たっているんだろう。

お腹はちよつと空腹を訴えているけど、咽喉は渴いていないし脱水症状もない。

迷い込んだけど、その日のうちに帰ってくる事ができたと思っていたのに。

時間の流れが違うのかな。

「ねえ、秋君」

『なんですか？』

「生きているって実感した」

『そう……。春休みになったら、また此方へいらっしやい。憎まれ口ぐらいなら幾らでも言っ差し上げますよ』

「うん、約束」

『ええ、約束します。では、切りますよ』

「うん。秋君、心配かけてごめんなさい」

『心配、などしていませんよ。時差ぼけしている様なので、十分に睡眠はとりなさい。では』

うん、帰ってきた。

徒歩のススメ

「おはよー」

「はよーっす」

「おはよう」

ああ、みんなの声が聞こえる。私にとっては四日ぶりだけど、みんなにとっては十日ぶり。へんな感じ。

「おはよー!」

「あ、やーっと来たわね。アンタがいないとつまんないったら」

「おはよう。風邪治った？ 大丈夫？」

「へーき、へーき。一週間寝込んだけど、そのあと凄くお腹が空いちちゃってさ、三日間はご飯食べまくってた」

「はあ、なにそれ。まあ、アンタらしいけど」

「病み上がり、そんな暴食すると身体に良くないですよ」

「だってえ、寝込んでいる間はずっと重湯だったんだよ？ 叔母さんに何度もおねだりしたけど、アレしか出してくれなくて。噛めないから嫌い」

「女将さんの気配りを台無しにしてどうする」

ほっぺを抓られ、ぐりぐりと揉まれた。

ああ、やっぱり普通の生活って良いよね。ここが私の世界だ。

「そういえば、今日は登校が早いですね。いつもギリギリセーフって駆け込んでくるのに」

「ん？ あ、今日はね叔父さんが手伝いはいいから、早く行けって徒歩で」

「自転車は？」

「ペシヤンコになった」

「は？」

「え？」

「体力取り戻せーって。タイヤをワザとパンクさせて、おまけに車輪もグニャ〜って曲げて、ブレーキとか細々分解して」

「そ、そうなんだ」

「ん、そうなんですよ」

「相変わらず、理解不能なスパルタね」

「ねー、ヒドイでしょ？ 分解した自転車を自力で直せたら、自転車登校して良いっていうんだもん」

「っていうのは、ウソ。」

ホントは、いつも通りに自転車に乗ったら、叔父さんが勢い激しく飛び掛って来て、自転車ごとなぎ倒された。逃げ遅れた上に受け身に失敗したから、自転車と地面の間に足を挟んで擦り傷つくったりして、地味な痛みを我慢中。うゝ、ヒリヒリするよ。

授業のススメ

私は、高校生であった。

不可抗力とはいえ、十日間は学校を休んだ。欠席理由は行方不明とは書けないから、無難に下痢と発熱が続いた、と記入しておいた。友達からノートを借りて書き写しながら、各授業のポイントなどを聞いてまとめた。

さよなら愛しの単位よ。いつか補修で必ず貴方と再会するわ。それまで待っていて、約束よ。

今日の体育。見学なんて嫌だから、叔母さんから体育教師宛の一笔を隠して出席したら、すぐに捕獲された。なんか叔母さんが、私の行動を見越して電話連絡を入れたらしい。うーん、悔しい。体動かしたい。

お昼。待ちに待ったお弁当の時間。

料理長特製の具たくさんスープ。ありがたく頂きました。

あのお時のお弁当は、腐っていた。振ったり投げたりしていたから、おかずがお弁当箱の半分に片寄っているのを覚悟して蓋を開けたら、ツンと香る酸味が強烈な異臭が漂った。すぐにゴミ箱に捨てた。本当に粗末にしてしまいました。料理長、ごめんなさい。

そして、その時から境に、身体中の水分がなくなったかのような感覚に陥って、声が嘎れ始めて喉が焼けるように痛くなった。

遅れてきた脱水症状。続く空腹。

三日間、水分と食料を求めて、家の中を這いずり回った。どこを探しても、重湯しか出てこなかった。

お気に入りのコンビニスイーツのクッキーでさえ、私の部屋から消

えていた。叔母さんは手強かった。

放課後。今日はよく頑張った。

友達にちよつと遊ぼうよ、と誘われたけど断って、帰ることにする。帰りも徒歩だ。理由は分らないけど、登下校中は走ったりスピードがでる行為を控える様に、叔父さんにきつく言い渡された。自転車に飛び掛ってきたのも、それが理由らしい。

ゆっくり町並みを見渡しながら帰路につく。改めて見入ってしまうほど、何かに飢えているように思う。

しばらく歩いて行きかう人の気配がなくなった頃、見計らったかのように向かい側から黒い自動車が静かに姿を現した。見覚えがあるナンバーだったから、私は立ち止る。すると自動車もすぐ側で停車し、ドアを細く開けた。

「乗れ」

馴染みのある声音は、いつも有無を言わせないのである。

ススメよ、ススメ。

緩やかに動き出す自動車。

途中の曲がり角を使って方向転換するのかと思っていたら、歩いて来た道を進み、高校の前を通り過ぎ、家がある方角からどんどん離れていった。

小父さんが来たということは、仕事の話よね。現場近くで説明されるのかな。でも、一応確認をとろう。

「小父上、道が違います」

「お前が一番引っかかりやすい。用心の為、市街地を一周して家に向かう」

はて、引っかかりやすいとは何のことだろう。

ナンパとか勧誘？ いやいや、それは無い。この辺りは古都とも呼ばれているから、行政も警察も取り締まりは厳しくやっている。

うーん、いくら考えても見に覚えがない。

家でのミーティングなら、まあいいか。深く考えてもしょうがないよし、町並みに集中しよう。

「これを」

アイマスクとノートパソコンを渡された。アイマスクは薄い布製の物ではなくて、隙間から光が入らない様にながしり覆われている。

「外は見るな。用心している意味が無くなる」

市街地を一周するだけなのに？ なんだか徹底的。映画の様な誘拐劇でしょうか。

気分は、地域を仕切る組織に認められていないモグリの密売人、になりそう。

叔父さんも小父上も、拷問っぽい稽古とか喜々としてやりそう。で、ぶっ倒れたら、お仕置きと称して腹筋一万回とか。

「ブラインドタッチで報告書を作成しろ」

ああ、行方不明中の体験記が欲しいのね。うん、わかった。わかつ

た、わかったです。

「キーの位置は大体分るだろう。とにかく打て。あとは此方で組み立て直す」

お察し、ありがとうございますっ。

時には振り返り、そしてまた進む。

「書き直せ」

手探りで作成した報告書は酷い出来だったらしい。小父上は単語の修正も補完もすることなく、早々に消去した。

だったら、普通にモニターとキーボードを見させてよ。二度手間じゃない。私は、人差し指でパソコンとにらめっこ派なのよ。数字のキーは、電卓と同じ配列が良いと心底思うのよ。

たつぷりと時間を掛けて家に到着した自動車は、私達を降ろすそのままどこかに走り去った。

家にあがり、小父上を応接間にお通しする。お茶を用意しようとしたら、いらないと断られた。

「仕事だ」

ソファに腰を落ち着けると、間髪入れずに小父上は切り出す。

「この辺り一帯で、行方不明または失踪事件が多発している。年齢層は十代後半から二十代半ばの青少年。性別は男女半々。自転車で通勤通学をしている者ばかりだ」

「私も、そのうちの一人？」

小父上は微かに頷く。

「彼らは早くて翌日、遅くて三日後には発見されている。軽い脱水症状と空腹を訴えているが、外傷は無い。そして、口を揃えてこう言っている。森を見た、と」

「見た、ですか？ 森に居た、ではなくて」

「見た、だ。異変に気付いて直ぐに引き返した者もいれば、一時的な目の錯覚だと思い、直進することを選んだ者もいる。後者は、途中で不可視の壁の様な物に行き当たり、そこより先に進めず戻ってきたと言っている。ちなみに、自動車でそういった事件は起こっていない。条件は、自転車、人力、青少年だ」

壁なんてあったのかしら。すいすいと進んじゃっていただけ。

ん？　じゃあ、叔父さんはそれに気付いて飛び掛ってきたのね。止め方が過激だったけど。

「本題だ」

小父上も私も居住まいを正した。

「お前が消えた」と報告があった同じ日の午後、四歳の女兒が母親の目の前で消えた」

テーブルの上に一枚の紙を置き、読めと促される。

「先に行く母親を追い、子供用三輪車を力いっぱい進めていたそうだ。速度、というのも一つの条件かもしれない」

人力の乗り物であれば、種類を問わない。それから、通常よりもスピードがでる乗り方をしている、のかしら？　じゃあ、自転車組みは、遅刻ぎりぎりセーフな人達ね。ちよっと安心、してどうするんだ私。

「母親は錯乱状態に陥って入院中だ。辛うじて聞けたのが、突然消えた、だ」

「そのお母さんは、森を見てない？　でも、どうして。壁があるなら、進めないはず」

私はかすりもしなかったけど。

「母親が森を見たかどうかは分らないが、子供は神秘の力が強いという。物心つく年頃とはいえ、まだ神秘側に偏っていたのかもしれない」

「それで壁に気付くことなく、通り過ぎてしまった？」

「もしくは、お前だ」

「私？」

「森は、此方の世界ではない。向こうにいる何者かが、何かを探して、此方とあちらを繋げた。探し物の条件に合っていたのかは知らんが、お前を見つけてあちらに渡した。その繋ぎ目を閉じるのを忘れて、女兒が通ってしまった。もしそうだとしたら、何者かは相当な間抜けだな。……仕事内容は、女兒を取り戻すこと」

小父上は言った。

「もう一度、向こうに行け」

仕事に必要な物の用意や段取りは、小父上自らがする。

せめてもの謝罪、らしい。

そんなこと気にしなくてもいいのにと、言ったこともあるし、仕事
が来る度いつも思う。だって、それ以上の感謝すべきことがあるか
ら。

小父上は、剣道や空手などの武道の稽古をつけてくれた。叔父夫婦
も、嫌がることなく引き取って、実の子のように育て見守ってくれ
たし、花道や茶道、料理、興味を持った習い事や好きな事を沢山や
らせてくれた。

だから、得たものが役に立つのなら惜しみなく使う。そんな事ぐら
いでしか、返せないから。

小父上が、女の子の家族から借り受けてきた物を預かった。

女の子が大好きだというキャラクターがプリントされているリュッ
クサック。スポーツドリンクのペットボトル数本とチョコレートペ
ーストを練りこんだ栄養補助食品を入れて、ファスナーを閉めた。

必要最低限の物しか入れていないけど、女の子は私よりも長く向こうに行ってしまったている。これだけで足りるだろうか。

「お前は耐えられるが、子供は危険だ。此方に戻る前に、必ず水分を摂取させる」

「はい」

「衰弱している可能性もあるが、自力で三輪車を運転させる。いいな」

「了解」

自分用の物を入れたシヨルダーバッグを肩に掛け、自転車にまたがる。

「条件は解っているが、いつ向こうに行けるのかは運次第だ。渡れるまで、この道を往復しろ」

「はい」

叔父さんが言うには、事件が起こり始めてからというもの、この辺りの道路は人の往来が減ったそうだ。生活道路にしている通ることを止むを得ないご近所さん以外は、観光客を乗せたタクシーでさえ近道には使わなくなった。

「まあ、そう変な目では見られまい。行け」

一回で森にいけることを願い、猛然と速度を上げる。ある程度進み、折り返す。また速度を上げた。

茜色に染まる夕暮れが、薄暗い風景に変わる。見えた、あの森だ。だけど、見えただけでは意味を為さない。

さあ、私をそこに渡せ。

はじまりの

町並みが薄れていく。

あの綺麗な夕焼けの色、訪れる夜の色、何もかもが消えた。

かわりに、木が迫ってくる。

十人の大人が腕を伸ばして輪になっても囲めそうにも無い、幹がとても太い樹木。

その大群が、出迎えた。

本当に獣道かと疑うがった場所に、吐き出された。

「どこで消えても、必ずここに出てくるのね」

地面を見れば、轍と轍にそって描いたアミダくじ。そこに小さな変化があった。

「これは、タイヤの跡、よね。線が三つある。一つは自由に動かせて、もう二つは固定された動き。ゆいちゃん、だっけ。あの子も、ここに出たのね」

アミダくじの上を縦横無尽に走る三本の線。指先で触り目で追っても、途中で途絶えてしまっている。

ここでお母さんが迎えに来るのを待っていたのかな。

「どこに」

コンタクトレンズを探す様に四つん這いになり、地面を念入りに見つめ観察した。しかし、他に痕跡を見つけないことが出来ない。

この轍から外れて、草むらを進んでいったのか。

「そういえば、私、いつ三輪車を卒業したっけ。憶えてないなあ」
けど、初めて自転車に乗れたときの事は、憶えている。

叔父さんと叔母さんは、自分達の休憩時間を削って、交互に乗り方を教えてくれた。

距離が伸びるごとに、頭を撫でて褒めてくれた。

一人で乗れたときは、手をたたいて喜んでくれた。それが嬉しくて、かすり傷の痛みなんてかんじもしなかった。

「ゆいちゃんもね」

ゆいちゃんも、いつか自転車に乗れるようになったとき、ご両親はとても喜ぶだろう。

こんな何も無い見知らぬ世界で、死なせたくなはない。

絶対に、送り返してあげる。

目を閉じて、右手を地面におく。深呼吸をして、土との波長を合わせる。この土地にいるなら、居場所を探れるはず。

そうして、目蓋の裏に森が浮かび上がる。どこまで広がる森。同じ風景が続き、場所の判別はし難い。所々、僅かにふりそそぐ太陽の光。生命の音。長老の様な、一際大きな木。その洞。

洞の中。時折動く影がある。微かに伝わる鼓動と吐息。静寂に包まれた場所では、鼓動と吐息は鮮明に聞こえる。

「いた」

怖がらせないようにして近づかなくては。なにか良い方法……、そうだ、歌なんてどうだろう。お花の歌とかお餅さん兄弟とか。個人的には赤鬼と青鬼の踊り狂う歌が好きだけど、ゆいちゃんが好きだとは限らない。あと思いつくのは南の大魔王とか、復活するクラリネットとか。

最初は挨拶からね。こんにちはと行って、名前を呼んであげよう。それから、優しく抱き寄せて暖める。

「私がゆいちゃんなら、泣き出しちゃうかな」

でも、ゆいちゃんは私ではないから、強い子かもしれない。ううん、強い子だ。だって、一人で耐えてきた。

そう、強い子だ。優しく微笑んで、がんばったねと褒めてあげよう。そして、一緒に帰ろうと言っただ。

それが出来るのは、今は私しかない。

はじまりの（後書き）

おまけ（改装中に載せてました）

く麗しの国王陛下と未来の旦那さまく

「君は彼女を何だと思っているんだ」

「何だ、とは？」

「彼女は女性で一人の人間だ。子を産める尊い存在……」

「思いません。全ての生命が等しく尊い。女性だけが特別ではありません」

「……」

「貴方が何を仰りたいのかわかりませんが、彼女が不満を訴えたのですか？」

「いや……」

「彼女は、常に自分の存在を確かめたいがっていますが、優しい言葉だけでは納得しません」

「……」

「ですから、罵りの言葉を使います。聞こえは悪いですが、彼女はそうやって自分を落ち着かせています。貴方がとやかく言う筋合いではありません」

「そ、そうか」

木の中の小さな世界

道を横切り、洞がある木を目指し奥へ奥へと行く。やっぱりというか、この静寂に耐え切れなくなって、歌をうたう。童謡を口ずさむのは何年ぶりだろう。

私が大好きな歌は、今もあの小さな歌集に載っているのかな。うる覚え状態だから、歌詞も旋律もあやふやだけど。

「ひよこ ひよこひよこ ぴよぴよ ぴよこひよこ こけこのこ」

とりあえず、無難な曲にしてみた。カエルだけじゃつまらないから、他の動物を取り入れてアレンジしてる。

ゆいちゃんの耳にはいるようにと、大きな声で叫ぶように歌い、目的の木に歩み寄っていった。

「えと、次は何を歌おうかな？ わあっ、すごく大きな木！ ほかのとは違うから、木の王様かしら。んー、なにこれ？ 真っ暗だわ、木の洞窟みたい。入っていいのかな、入っちゃおうかな」

立ち止って洞の中を覗き、数歩離れてまた近寄る。

「うん、ここでいつか。ほかにお家とかなかったし。雨がふっても濡れないでしょ」

もう一度、中を覗いて足を踏み入れようとした時。

「ママああああ」

「ゆいちゃん？」

探していた女の子が飛び出してきた。

自分以外の人間が現れたことで、緊張の糸が切れたんだと思う。堰を切った様に泣き始めた子を、何度も大丈夫と繰り返し返し、頭を撫でたり背中を擦ったりして宥めた。明るい場所に連れ出して、ハンドタオルで涙を優しくふき取る。

「お姉ちゃん、だあれ？ どうしてゆいのなまえをしってるの？」

「私は、ゆいちゃんのパパにお願いをされて、ゆいちゃんを探しに来たの」

「パパ、ママ。お家、お家に帰るっ」

「うん。じゃあ、私と一緒に帰ろうね。でもその前に、ほら、見て。ゆいちゃんが大好きなリュックよ。ゆいちゃんのパパから借りてきたの。ジュースとお菓子があるわ。食べる？」

こくこくと頷くゆいちゃん。

栄養補助食品の封を切り、中身を出してあげた。同じ様にスポーツドリンクを差し出して、飲むように促す。これを飲ませたら、移動しよう。

「ゆいちゃん、三輪車はあるかな？」

少し気分が晴れたのか、足取りが軽くなったように見える。最奥まで行って座る動作をすると、その姿勢のまま此方に戻ってきた。

「ゆいの三輪車っ」

「可愛いわね。このまま乗っていく？ それとも、私が運ぶ？」

ピンクに塗装された三輪車と私をと見比べて、私の腕にしがみ付く。

「おんぶ？」

離れるのは嫌だけど、拒絶されるのはもっと嫌なのだろう。恐る恐る窺う様に聞かれた。

「うーん。だっこでもいい？ これも持って行かなくちゃ行けないから」

満面の笑みで頷いた。

「お姉ちゃん、だいすきっ」

左腕に子供を抱き上げて、右手は三輪車の支柱を持ちぶら下げる。一度で全部運ぶのはきついけれど、どちらも置いて行く事は出来な

い。二分か三分歩けば、来た場所に着ける。少しの我慢だ。

数歩進んで一旦立ち止り、三輪車を持ち直す。同時に周囲を見回して、危険が潜んでないか用心する。

「じゃあ、行こうか」

もと来た道を歩き始めた。

あつちとこつち

「さあ、ゆいちゃん、これに乗って」
正直言うと、四歳児の片手抱っこはきつかった。腕が小刻みに震えている。

三輪車を置いて、サドルにゆいちゃんを座らせる。背負わせていたリュックからスポーツドリンクを取り出し、お腹が膨れ上がるほど飲ませた。

一生懸命に口に含む姿を見て、虐めている様な気持ちになったけど、こればかりはしょうがない。ある程度成長していた失踪者の青少年達と、十歳にも満たない子の身体づくりは違うから、危険を回避するには無理矢理にで摂取してもらえない。幸いなことに、この子は自分から飲んでくれているけど。

「も、おなかいっぱい」

「うん、いい子いい子」

半分になったペットボトルをリュックに戻し、ファスナーを閉めた。

「じゃあ、ゆいちゃんと私とで、競争しようね」

「きょうそう?」

「うん、よーいどん、でゆいちゃんが早いか、私が早いか。負けたほうは、コチヨコチヨくすぐっちゃうのよ?」

掌を広げて指先をばらばらと動かした。きゃっきゃと言ぶ。

「ゴールはどこ?」

「ここを真直ぐ走ったら、ゆいちゃんのお家のすぐ近くに出るのね。そこから、ゆいちゃんのパパが立っている所までよ」

小父上はゆいちゃんの父親に、日本との時間の流れが違うことを説明し、その上で愛娘の帰還の立会いをするかどうか決めると言っていた。立会いとは簡単にいうけれど、暑くても寒くても雨が降っていても、外でただずっと立ち尽くして待っているしかない。人員を用意するか、お勤めしている会社を休んでの立会いなどの調整だと

思う。

以前の携帯電話の件も報告したが、電波状況が確實ではないと却下された。でも、無事帰ることが出来たら、一応電話してくれるらしい。私は、その電話を鳴ってから帰ることになっている。

「ずつとまっすぐ?」

「そう、まっすぐ走るのよ。わかった?」

「うん!」

元気良く頷き返して、三輪車のペダルに足を掛けた。

「よし、準備は良いかな? いちについてえ」

ゆいちゃんの気持ちを盛り上げる為に良い子ねと一撫でして、お決まりの合図を言う。

「よーい、どんっ!」

殆ど歩いている感じで、ゆいちゃんを追いかける。蛇行しながらも、時折振り返っては私が付いてきているかを確認している。

「ゆいちゃん、そんなに遅いと抜かしちゃうぞ〜」

「きゃー」

競争というよりも、鬼ごっここの面が強くなってきたかも。わざと低めの声を出して、追い詰める素振りを見せた途端に、力いっぱいペダルを回し始めた。

そう、その調子。

「まてえ〜」

「きゃーこわ〜い〜」

不意に、その姿が消えた。あつちに戻れただろうか。

ピルルルル

「うん」

鳴った。帰還に成功した。

「よし! お仕事成功。あとは帰るだけ」

「君はダメ」

なんか聞こえたけれど、無視だ無視。自転車のスタンドを外して…。

「君はだめだよ、帰さない。いや、こっちが君の居るべき世界。どこにも行かせない」

幻聴、にしておくべきだ。

私が居るべき世界、ってなに？

「さあ、こっちを見て。僕の花嫁」

私は、秋君の花嫁さんです。

私の世界

ここに一台の自転車がある。

高校入学のお祝いだ、と叔父さんが購入してくれた物だ。自動車タイヤの老舗メーカーが販売しているもので、最低三年間乗るという事と性能と安全を考えて、ちょっと高価な自転車を選んでくれた。どこへ行くのにも、これを使っている。私の自慢の愛車だ。

「僕の花嫁」

片足でけんけんをする様にして助走をつける。振り切るにはスタートダッシュが重要だ。最後の踏み切りだと決めた足で思い切り大地を蹴り、その足を反対側のペダルに乗せようとした時だった。

小さな石ころに躓いた様なタイヤの感覚がしてスリップをした。自転車は斜めに傾きながら滑り、更に何か阻まれて、身体が投げ出された。

何か。ああ、見えない壁、というやつか。どうして今になって、邪魔をする。

もんどりうつて転がる。頭の中はやけに冷静で、私って意外と受け身が下手なのかと思ひ浮かぶ。

「どこにも行かせない、って言っただろう？ 扉は、強制的に閉めたよ」

強制的？ なんだそれは。勝手に、異なる世界を繋げたのは貴方たちだろう。

「君をこっちに呼びたいだけなのに、なぜか余計なものが飛び込んでこようとしたから焦ったよ」

私の顎先を持ち上げ、覗き込んでくる。すぐに視線を逸らした。

「どうしたのかな？ 君は、僕の花嫁になれる存在なんだよ。もっと喜んで良いんじゃないのかな」

これは、あれだ。一言でも口を開いたら、他人の意思なんてお構いなしに自分の理屈を並べる人種だ。誰が喜んでやるものか。

「ここが何処だか分らないのかな。それとも、言葉が通じていない？」

馴れ馴れしく肩に触るな。

「言葉が通じないなんて事はないよね？ だって、ここは君が産まれた森だよ。君のための揺り籠だ。君の知識に無い言語でも、ここにいる間は君が一番理解できる言語にすり替わるはずだ。僕が喋っている事は解るよね？ 住まいを城に移したら家庭教師を用意しよう」

無言を貫き通してやるんだから。

「そつだ、騎車を見ただろう？ あれは森に入る唯一の手段で、揺り籠の主によつて形状は違つてくるんだ。歴代の記録には幌付馬車が多いとあるけれど、君の代になって、ああいう風になつたんだよ。はじめは誰も動かし方が分らなくて困惑したもんだよ」

自分が優位な立場にいると信じて疑わないんだろつな。おしゃべりな人間つて、良いんだか悪いんだか。

「それでね、宰相達が心配するんだよ。森と騎車は、竜人の心が一番表れやすい。花も咲かないし動物もいない。そして、あのような不可解な乗り物では、殿下が危険に晒されますつて。そんなことないよね」

りゆうじんつて、竜神のこと？ 私、神様？

いや、そんなことより、騎車つてあれよね、トゲトゲの電車。あの半透明なトゲトゲつて、私かとげとげしているつてこと？ 電車っぽい車体は、電車のイメージだったのかしら。

「さあ、行こう。すぐそこに騎車が停めてある。続きは城に帰つてから話そう」

嫌だ、行かない。私は帰るの。

城なんて、竜神なんて、花嫁なんて知らない。

私の城は、叔父さんと叔母さんが居る家よ。

ぐずるように暴れた。だした。

閉ざされる世界

座り込んだままの私を立たせようと差し伸ばされた手。この手を一瞬でも握る事になるのは嫌だけれど、何処にあるのかも分らない城に連れて行かれるよりは幾分我慢できる。

支えてもらいながら立ち上がる途中で、腕に力を込めて引き倒した。突然の事にバランスを崩して倒れこむ。

「かはっ」

ついでに、背中に足跡を付けてやった。

倒れたままの自転車にかけよって引き上げ起こす。

もう一度、もう一度よ。次は向こうに帰られるかもしれない、成功させる。本当に帰れなくなっても、逃げて逃げて、どこまでへも逃げ切りらなくては。

「殿下っ！」

「この娘……、無礼者！」

ああそうだ、電車だ。あの乗り物は、私の心が表れている、と言った。では、思惑一つで制御不能になるのかも。

エンジンを切れ、と念じてみよう。でもその前に、此方に向かってくる男達を片付けなくちゃ。

一人は、おしゃべり男を立ち上がらせて、服についた土埃をはらっている。もう一人、無礼者と叫びながら腰に佩いた剣を抜いて、切っ先を私に向けた。

抜くのか、抜いたな。遠慮しなくてもいいのね。

一つ呼吸について、精神を研ぎ澄ませる。想像するのは、刀。手に馴染む柄。ぼやけた輪郭を形にして、具現化させる。掌の中に現れた日本刀を強く握り締めた。

「よせっ」

「殿下、危険です。お下がりください」

「僕の花嫁に何をす。放せっ」

「いけませんっ」

気魄と共に、相対する剣士に切りつける。花嫁という言葉に躊躇っているのか、その鈍さが伝わってくる。

押し切れる、そう確信した。切伏せても構わない、必要なことだから。

大きく踏み込み、上段から振りかぶろうとした時だった。浮いた片足に、何かが絡みついて引き摺り倒された。

冷たい無機質な感触がする。鎖だろうか。足を見て確認したいけど、武器を持つ者から目を放すことなんて出来ない。

「花嫁という立場に在りながら、殿下のご尊顔に泥を塗る不届き者」おしゃべり男を殿下と呼び牽制していた男は、視線を自転車にやって目を細めるた。

「そのような物があるから、逃げるといふ行動を取るのでしょうか。下らない芽は潰すに限る」

男は二言三言呟いた。よく聞き取れなかったが、同時にグシャリと嫌な音がする。

私の大事なもの。

叔父さんが、いつも厳しい叔父さんが、その時初めて照れた顔を見せてくれた。はにかんだ様な子供っぽい表情をして、それを叔母さんが珍しいものを見たとからかっていた。

その日だけでも、この自転車のカゴには色々なものを積むことが出来た。

私だけの自転車。

私^があ^げた悲^鳴は、ど^こにも誰^にも響^くこ^とな^んてな^かつ^た。

欺瞞の巢

「なんと、忌まわしき黒ではないか。この者、真にシルヴェスト殿下の花嫁なのか」

おしゃべり殿下を牽制していた男、牽制のように見えた、彼は騎士団副団長らしい。あの場にいた他の団員がそう呼んでいた。おしゃべり殿下からの信頼は殆ど無いに等しい様子だった。それを裏付けるかの如く、今はこの広間を取り仕切っている男の側に張りついている。副団長という餌を蒔いた男と、それに飛びついた男。仮初の主従関係。次の餌の名は裏切りか。

「それにこの貧弱な身体。子を望むことが出来るのか」
出るトコは出てますよーだっ。それに私は日本人だ。黄色人種、黒髪黒目で何が悪い。

心の中で、イーッと舌を出した。
上半身を縄で結び固められて、大広間に連れてこられた。背後にたつた男が体重をかけて押し掛かり、膝立ちを余儀なくされた。まるで時代劇ドラマの、白洲に引つ立てられた罪人だ。冗談じゃない。鏡のように磨きぬかれた床と行儀良く並ぶ柱の奥に、十段ほどの階段があつて、最上段には豪華な椅子が一脚置かれている。

「そち、名は」
なんともやる気の無い王様だ。椅子から滑り落ちそうな姿勢で座っている。いや、寝そべっているというべきか。寝椅子ではないから窮屈そうだ。

その足元に集う臣下達。時々私を盗み見ては、ひそひそと小声で会話を交わしている。

「父上。この者は己の名前どころか、我々の言語に慣れておりませぬ。家庭教師を付けて勉強させますので、どうか歓談はご容赦下さいませ」

「ゴライアス。名を決めよ」

「父上っ」

「はっ。……そうですね、竜族とわが国の繁栄を願って、シエリー、
というのは如何でしょう。子宝の象徴でもある果実の名を冠せば、
この身体も少しは肉付が良くなるというもの」

「そうか。シルヴェスト、それで良いな？」

「……………はい」

ちよっと、おしゃべり殿下。花嫁を強要しておきながら、なぜ苦痛
に歪むような顔をしているのよ？

「婚礼の儀は三カ月後。では、仕舞い」

広間に集められた人間達はまばらに散って行く。

背後の人の気配が消えて身体が軽くなった。縄が解かれて、おしゃ
べり殿下が起き上がらせてくれた。仕切り男も近寄ってくる。

「シルヴェスト殿下。花嫁の世話をする者を手配致します」

「ゴライアス。花嫁の世話は僕がする。手も口もだすな」

「殿下、それは危険で御座います。聞いた所によると、この者は殿
下に斬りかかったそうではないですか。御身の安全のためにも、わ
たくしが手配した者を……………」

「僕は、手も足も口も出さな、と言っただ」

「……………」

仕切り男が一步下がり、恭しく頭を下げた。その仕草は芝居がかっ
ていて、気持ち悪い。

「さあ、行こう。君の部屋に案内するよ。必要な物があつたら、僕
が用意した侍女に申し付けてくれ。この国にある物なら用意できる」
じゃあ、世界と世界を繋げて。

「帰りたい、なんて言わないでね」

そんなことは言っていないわ。世界と世界を繋げて、って言ったの。
用意できるというのなら、用意をして。その後のことは、自分でな
んとかするから。

「幸せにするから」

そんなもの、
いらない。

例えば、こんな男。

私は、確かに父と母の間に産まれた。

難産だったらしく、出産後しばらくして母は他界した。

その後、父は、自身の実家や母の実家の手を借り、専ら母の実家に頼っていた様だけど、ともかく働きながら子育てに奮闘したらしい。その父も、私が五歳の時に交通事故で他界した。

私の引き取りに、母の実家が当然のように名乗り出たけれど、父の弟夫婦も一歩も下がることなく粘り続け、ついには勝ち取った。以来、父方の祖父母と叔父夫婦と旅館の従業員さん達に囲まれて育った。

母の実家に預けられることが多く、その事にちよつとした嫉妬心と羨望があつたらしい。

そうして、父の親友だという小父上と、小父上の同業者になる予定だという秋君に出会った。

他の人とは違うんだな、と認識し始めた中学生の時だった。

「何が如何違うというのです」

「育った環境？」

「疑問系にしないで下さい。それは理由になりません。一人一人、各家庭、各地域とその行事、言動に思想。誰かと全く同じになる事が異常で、違うことが普通です。貴女と容姿も性格も瓜二つの人間がいますか？」

「世界には、三人ぐらいそっくりな人間がいるっていうし」

「それは容姿のみでしょう」

「でも、容姿が似ているなら、容姿以外の部分にも三人いたって不思議じゃないでしょ？」

「育った環境が違うから、と言ったのは貴女ですよ」

「……………あれ？」

そのあと盛大に馬鹿にされたけど、なんだかんだと真面目に向き合
つてくれて嬉しかった。

違うことが普通だと、安心して良いと言ってくれたのは、秋君だけ
だった。

その時から、小父上の仕事の手伝いをするようになった。少しでも、
秋君と同じ場所に立ちたくて、小父上を利用した。小父上も、私の
刀の精製能力をに目を付け利用した。

唯一の救いだっただのは、依頼される仕事が私利私欲とは無縁という
事だけ。無縁ではあるけれど、それなりの覚悟が必要とされる仕事
を、幾つもこなした。その度に『何か』に迷い込み、秋君に泣きつ
いた。

働くのが普通で、遊び呆けているのが異常だと、泣くことが普通で、
我慢を要する時以外涙を流さないのは異常なのだと。

安心して眠りにつけた。

これからは此処で生活するのだと案内された部屋は、居室と寝室の
二間続きと浴室とお手洗がある、所謂スイートルームだった。飾
りつけは意外と質素で、天蓋付のベッドやシャンデリア等の贅沢品
は無い。

サイドボードやテーブル、調度品も手は込んでいるが素朴な味わい
を基調としていた。

豪華な物だったら、気に入らないと外に放り投げてやろうと決めて

いたから、ちよつと拍子抜けだ。

意気込みが抜け切った所で、睡魔が襲ってきた。

前は陽射しが気持ちよくて昼寝をしてしまい、あっという間に一週間経ってしまっただけ、今はどうなんだろう。

三ヶ月ぐらいは経ってしまったのか。そういえば、この世界は夜が来るのだろうか。一時間は、何分？

時計はあるのかな、日時計かな。

眠いというのに、次から次へと疑問がわいてくる。

ダメだ、もう目蓋を持ち上げてられない。

もういいや、このまま絨毯の上で寝よう。土足が基本みたいだけど、眠気に勝てない。

私の事は気にせず、皆さん自分のお仕事に戻って。

では、おやすみなさい。

玉座の男と、その息子。

「要するに、私の覚悟は本物の覚悟じゃなかったってことよね。甘えていたんだわ」

ベッドの上で目が覚めた。誰かが運んでくれたらしい。誰って、誰かしら。

「それとも、甘えられることが嬉しかったのかしら。婚約者、って何だろう？ おしゃべり殿下も、婚約者なのかしら。もしかして、殿下というぐらいだから一夫多妻制？ それは嫌だな」

窓の外は、夜だった。

「あれ。嫌だって、なにが嫌なのかな。まるで絆されているみたいじゃない」

私は、絆されない。何よりも固い拒絶の意志の、一番重要な部分よ。絆されるということは、認めてしまうこと。認めるということは、自分の築き上げた世界を否定してしまうこと。否定するということは、否定するということは……。

「なにがシエリーよ。子を産ませるだけの道具扱いじゃない。私は、りゅうじん、ではないのよ。人間よ」

言葉は理解できていた。森の中だけと、おしゃべり殿下は言っていたけど、日本語でも充分に通じそうだ。中には聞き慣れない言葉もあるけれど。

りゅうじん、きしゃ。漢字に直したら、竜神と汽車。でも、汽車という割りには煙を吐き出す煙突がなかった。ううん、心の表れだった。きしゃという言葉も、脳の中で電車に変換されているの可能性も否定できない。それならば、汽車も電車も似たようなものだ。

「外、でも良いよね」

バルコニーに備えられた階段から庭園に出た。

「こんばんは、竜人のお嬢さん」

植物で作られた迷路の様なところを歩いていた。所々にベンチや東屋があつて、密会や逢瀬にはうつつつけの場所だ。

入り口からどう歩いたのか覚えていないけれど、東屋に行き当たつた。そこには王様がいた。

「来るとは予感していたのだけれど、こんなに早くに会えるとは思わなかつた」

昼間の寝そべっていた姿と同一人物かと疑うくらいに、ベンチに座る王様は雰囲気違つていた。

「お嬢さんは、本当を言うと我々の言葉を理解している、だろう？

喋りたくないのなら、喋らなくても構わない。しかし、時としてお嬢さんの不利になる。それだけは覚えておいたほうがいい」

あの端的な物言いからは想像出来なくらいに、よどみなく喋っている。

「不思議かい？」

頷きとか簡単な動作でも会話できるけれど、普通に話しても大丈夫だろうか。

「言いたいのは、昼間の姿からは想像できない、だろう」

普通に会話をしたほうが良さそうだと思つた。

「はい」

「我々竜族は、人族と良き関係を築き上げていると思う。しかし、人族のすべてが良き隣人かと問われたら、そうではないと答えてしまふ」

「ゴライアス、という人のことですか？」

「彼だけではないのだけれど、権力という重みを理解しないまま、富や名声を求める人間は少なからずともいる」

王様はベンチを指して座るように促した。

「茶はどうかね？」

「いいえ、結構です」

テーブルの上にはティーセットとスコーンのようなお菓子があり、側にはカートが置いてあった。御自分でお運びになられたのか。

「口に合わない、という事ではなさそうだ。毒草が盛られているかも知れないという事が懸念かね」

「はい」

「ずいぶん素直な子だね。もっとじゃじゃ馬かと想像しておったよ。鞆一つで、騎士を気絶させたそうじゃないか」

竜族の年齢など判るはずもないが、姿だけで判断するなら初老に差し掛かった年齢に見える。浮かべた笑顔は好々爺を思わせる。

「……いえ、頂きます」

「毒が入っているかもしれないの？」

「陛下は、私を待っていたと仰られた。ここは陛下の城で御座います。殺すというのなら、今日だけでも機会は沢山あったはず」

「なかなか利発のようだね。歓迎しよう、竜人の娘よ」

ティーポットを取り、ソーサーに伏せて置いたあったカップにお茶を注いでくれた。

「見ての通り、この国は竜族が王を勤めている。私の仕事は玉座に座り暗愚を演じる事、ただそれのみ。政は人族が担っている。その多くが世襲制で、権力を誇示する事だけは忘れない」

王様は言葉を切り、お茶を一口飲んだ。

「勝手に名前を付けてすまなかった。竜族にとって、竜人とは慈しむべき存在だが、正しく理解されない時もある。ゴライアスは最たる例だな」

「私、一万歩譲って結婚したとしても、子作りだけは拒否します。

私の婚約者は、家族を築きたい相手は、殿下ではありません」

「そうのようだな」

「……物分りが良いのですね」

「いや、そうでもないが。君はこの世界で産まれた訳ではない。シルヴェストは、森で産まれはしたものの天変地異か何かで移動してしまったと信じているようだが。君が経験して培ってきたものは、この世界では相容れそうにも無い、という事だけは解っているつもりだ」

ぬるくなつたお茶を飲む。

不味くはなかった。

誘い

王様に迷路の出口まで案内して頂いた。

別れ際に、いつでもおいで、と言われ内心驚く。招待されるということ、気に入られてしまったのか。

悩みの種になりそうだけれども、秘密の話し相手が出来たようで、なんだかくすぐったい気分になった。

毎夜、あの場所でお茶を楽しんでいるのだろうか。そういえば、スコーンの様な焼き菓子が置いてあった。こんど訪ねたいと思ったときは、手土産にクッキーを渡そうか。その前に、厨房を貸してくれるかな。誰に言えばいいんだろう、侍女さんかな。

部屋に戻り、寝台の上で横になる。

「ああ、そうか。殿下が運んでくれたのね」

では、礼を言わなければ。ああ、ついでに殿下にもクッキーを。

一度ぐっすり寝たせい、なかなか眠りにつけなかった。

私の体内時計は一日二十四時間で回っている。

多少誤差はあると思うけど、旅館の早朝のお手伝いに間に合う様に起きられていたし、十二時丁度になるとお腹の虫が騒ぎ始める。

それが当たり前だった。でも、今は違う。

起き抜けに見た夕日が目に染みる。

王様とお話していたのが深夜ぐらいたとすると、半日以上は寝ていることになる。またすぐに夜が来る。寝なければならぬ。しかし、目が冴えていて眠れない。

七時間ぐらい寝たつもりでも、起きてみれば真夜中だったり日中だ

ったりと不規則になっていた。

辛うじて日中に起きることが出来た日は、真つ先に侍女さんが来る。それから家庭教師が呼ばれ、授業に入る。

その横では、せつせと食事の準備をする侍女さん達。勉強中に食事をするなんて以ての外だと思うけど、彼女達は一步も引かない。私も先生も顔を引きつらせた。

陽が南天に昇りきる頃に起きられる様になったと喜んでいれば、すぐに睡魔が寄り添ってきて寝てしまう。

そんな日々を過ごし、漸く朝に起き、睡魔にも耐えられるようになった頃。

殿下が、私の部屋を訪ねてきた。

「外に行きたくない？」

妙案が浮かんだとばかりに、にこにこ微笑んでいる殿下。その様子を眺めていると、こちらまで微笑んでしまいそうだ。

首を傾けて、窓の外を見た。外出禁止ではなかったのかしら。

「そう、外だよ。城下町とか見たくない？ どこか行きたいところある？」

そう聞かれても、私はこの国の観光名所なんて知らないし。

「小高い丘で散歩するなんていうのはどうかな？ 部屋に籠りつきりじゃ身体に悪いよ。もっと太陽の光を浴びたり、風にあたらなくちゃ」

そういつてはしゃいだ様子を見せる殿下は、侍女さんに耳打ちをすると部屋を出て行ってしまった。

やわらかな陽光

「姫様、こちらにお召しをかえを」

殿下が出て行つてからすぐに着替えを勧められた。手渡された服は、ヨーロッパの民族衣装の様なワンピースのもので、民が着る一般的な服とのこと。

髪も丁寧に櫛を入れてもらつて結び上げる。侍女さんは、自分の作品に満足したのか一つ大きく頷き、最後に帽子を被せた。

「殿下がお待ちになつております。ご案内致しますので、はぐれな様について来てくださいませ」

何処に連れて行かれるのかと訝しむ。

こつちに着てきた服とシヨルダーバッグは取り上げられた。処分したのだと聞いた。

服はお仕事着だったから問題無いけど、バッグには叔母さんに返してもらつたクッキーが入つていた。非常食と甘味で一石二鳥だったのに。覚えてなさいよ副団長、食べ物への恨みは恐ろしいのよ。

断固たる拒絶の結果、ついに放り出されることになつたのかと気分が少し浮かび上がったけど、そうではなかった。

連れ来られたのは城の裏正面となる場所で、崖に面していた。天然の要塞だ。

近くには平屋作りの建物が何戸か並び、その奥には既舎の様なものがあった。時々、馬とは違う動物の嘶きが聞こえ、飼育員なのだろうあぶみや鞍を持つ人間が出入りをしていた。

「姫様、こちらに」

夜の庭園以外には城内を歩いたことがなかったから、此処に来るまでも興味を引いたものが幾つもあった。その度に足を止めて眺めていたら、侍女さんに苦笑されてしまった。

外出禁止と命令が出ている訳では無さそうなので、今度散策してみるのも良いかも。

「殿下、お待たせいたしました。姫様をお連れ致しました」
ん？ 殿下だつて？ 何処にもいないじゃないの。

「さあ、姫様。こちらに足を掛けて、勢いを付けてお登り下さい。鞍を掛けてありますので、落ちない様にお座り下さい」

「あの、これに乗るんですか？ 他の、ええと馬車とかは……」

「今日は快晴でございますので、空から国を一望してほしいと、殿下より言伝を頼まれております」

「空から？」

「はい。ですので、こちらに騎乗してくださいませ」

侍女さんが騎乗するよう指し示しているものは、コモドドラゴンが巨大化して翼を生やした様な動物で、体表は白銀色の鱗に覆われて輝き、瞳は透通るような緑色をしている。形だけなら、どこか見たような記憶がある。

「……これに？」

「はい。殿下であらせられます」

「ええっ」

「さあ、どうぞ」

「え、いや、うん……」

竜族というからには、竜にも変身できるのは当たり前というか、むしろ竜が本来の姿か。でも、驚きは隠せない。これが、殿下だとはあ、そういえば、さっきから普通に喋ってなかった？ 言葉が分らないだなんて、嘘がばれちゃったじゃない。ああ、どうしよう。なんて言い訳を、いや、言い訳なんてしたら余計に墓穴を掘ってしまった。

侍女さんが背中を押して、早く乗れと無言の圧力を掛けてくる。

もうだめだ。観念したくないけど、観念するしかない。

自棄気味に、竜に変化した殿下の首を跨いだ。

頭の中で、殿下の声音が響く。竜になっても、人のときと同じ音が聞こえる。

『ほら、みてごらん。あれが城下町だよ。色とりどりの布製の軒先がある所、賑っているだろう。あそこはバザールで、美味しい食べ物や綺麗な小物細工が売られているんだよ。今日は丘に行くけど、次は城下町に連れて行ってあげるよ』

市街地の上空を旋回しながら、街を見下ろす。城を中心に放射状に広がる町並みはとても綺麗で、絵葉書になりそうな風景だ。

竜が飛んでいる事に気付いた人々は、空を仰ぎ見ては手を振っている。

「親しそうですね」

『うん、街の人たち全員を知っているわけじゃないけど、お忍びで遊びに行ったりしているから。それに白い竜は、この国に僕だけだから』

殿下だけ白なのか。王様は何色だろう。

ふと、くすくすと笑い声が聞こえた。

「何か変なことでも？」

『違うよ、変なことじゃない。すごく良い事だよ。僕、君と会話が出来る、とても嬉しいんだ』

弾む声に、少し罪悪感が湧いてくる。

隙あれば城から脱走しようと考えてるのに、この殿下は疑うことを知らないのか。

『ああ、見えてきた。あそこに大きな木があるのが見えるかい。陽射しと木陰と風がとても気持ち良い場所なんだよ。お昼ご飯を持ってきたから、一緒に食べようね』

なんでこんなにも慕ってくれるのだろう。

こい ねがう

竜っていう生き物は大変なんだな、と思った。

そもそも、彼ら本来の姿に、人族が着用する服は必要無い。けれども、人族と生活を共にするには、どうしても服を着なければならぬ。人族の常識とはいえ、あの巨体から人型へ、更に服を着る。窮屈そうに思える。

簡単に言えば、殿下は裸だった。いまは大きな木、といっても森から比べたら小さいが、その反対側で服を着ている。

「そうでもないよ。これは、僕らが決めた事だから。人族と共存という道を選んで王族として迎えられなければ、恐怖の対象となって狩られる末路しかなかっただろうからね。畏怖ならまだ良いのだけれど。まあ、大昔の竜族が現状をみれば、嘆かわしいとか誇りはどうしたとか、叱られるのは間違いないけどね」

そういうものなのでしょうか。自分達と同等あるいはそれ以上の高度な知識を持つ種族間では……。というか、私の考えが伝わっている？

「うん。君が竜人であるという証拠だよ」

思わず睨みつけてしまう。これは人権侵害ではなかるうか、投げ飛ばしても問題ないわよね。

「わあ、駄目だよっ、そんなことしてはっ。自分の身を護れるのは良い事だけど、それは僕が君の側から離れていて手が届かない時にだけして。それ以外は、僕が護るから。あと、この伝心は、変身時とその後数分だけだから、我慢してほしい」

「そうなのですか。でも、立派な覗きよね」

「違うよ、伝心だつてば。大昔の竜族は人型を取るのを嫌がついて、それで、ええと、ほらっ、神官。神官や巫女と会話する手段として、その神官や巫女も竜人である場合が多かったけど。とにかくそういう事なんだよ。いまは、もう聞こえてないよ」

必死に言い繕う姿を見ていると、微笑ましさをちよつとだけ吹きだしてしまふ。堪えるのつて難しい。

「さあ、お昼にしよう。料理長に、今日の計画を話したら、腕によりをかけて作ってくれるつて張り切っていたよ。だから、僕もそれを楽しみの一つにして、朝食を抜いてきたんだ」

殿下は、殿下が着替えている間に持つていている様にいつたバスケットを指して、目を輝かせた。

その雰囲気から、サンドウィッチやサラダなどの定番メニューではなく、前菜からデザートまで揃ったフルコースを想像した。

大判の敷物を敷いて、二人で座る。

「殿下、私がやります」

「だから、いいんだつて。僕が、君にやれる事は何でもしてあげたいんだ」

殿下はバスケットの中身を出して並べ、二人分に分けたりと食事の準備を整えた。

旅館の手伝いをしていた私としては、こういう給仕を待つていている時間は慣れることが出来ない。侍女さんの仕事振りに感心して、その手際を盗もうと観察しているのだが邪魔していることに気付いた。どうも抜き打ちチェックをしている様に捉えられているのだと知つた。それからは、極力見ないようにしている。

自分の事は自分でするようにと躡けられて育つたから、何でもしてあげたいと言われると困り果ててしまふ。けれども、結局は押し切られて黙つてしまふのだ。

「他人に何かしてもらうのは嫌い？」

「苦手、です。自分の事は自分でするようにと、育ての親に言われしてきたから」

「そうか、そうだよね。僕、本当は解つているんだ。父上にも何度も諭されたし。君がこの国この世界とは別の場所で生まれたことを」

「……………」

「でも、異なる場所においても必ず帰つてくると信じてたし、帰つて

きたんだ。君にしたら、知らない世界で嫌なことばかりにしか思えないみたい」

その通りですけど。でも、殿下が嫌いって訳でもない。王様は理解力がありそうで好感を持つことが出来る。

「妹がいるんだ。妹にも竜人がいるんだけど。あ、もちろん男の竜人だよ。ずっと羨ましいって思っていた。子を残す、というのは王族の仕事でもあるけれど、でも仕事以上のものが、彼女とその竜人の間には出来るんだよ、出来るはずなんだ。僕には、それが羨ましかった。だから、君が来てくれて嬉しいんだ。こうして、もっと話をして互いのことを理解できるのも、今までは願うことしか出来なかったけど、出来るようになった」

殿下は顔を真っ赤にしてそっぽを向く。

「さ、食べてしまおう」

照れ隠しなのか、急いで食べ物を口に運び、そして咽っていた。

あいのこ

「やあ、いらっしやい」

あれから日が暮れるまで殿下と過ごし、城に戻った。部屋の前まで送ってもらい、近いうちに妹を紹介すると言って、殿下は居室に帰っていった。

「こんばんは」

夜になってこっそりと部屋を抜け出し、庭園の東屋を訪れる。以前に来た時と同じ様に、テーブルの上にお茶とお菓子が置いてあった。「いつも此処でお茶を楽しんでいらっしやるのですか」

「ああ、そうだよ。いつもというより、毎日、だね。私はここで寝泊りをしておるから」

「毎日？」

「部屋はどうにも好かない。竜族の本能というのかな、室内というのは窮屈過ぎるのだよ。自然もない。ここは人の手が入っているとはいえ、草木がある。落ち着けるのだよ」

「てつきりお部屋に戻られてからお休みになられるのかと思ってました。あ、お茶は私がやります。陛下はご寛ぎ下さい」

「うむ、そうかね」

ティーポットを取り寄せて、王様のカップにお茶を注ぐ。中身はハーブティーの様で、ほのかにシトラス系の香りが漂う。注ぎ終わると、丁寧にかップを王様の手元に届け、次は自分用にと、予備のカップに注いだ。

「今日、殿下と二人で散歩に行つてまいりました」

王様は静かにカップを口付けている。

「殿下というか、竜族の、ほんの一部ですけど、内実を知ることが出来たように思います」

「そうかね」

「はい。ほんとうに少しですけど、殿下が望んでいるものは、

知ることが出来ました」

「……竜族同士で子を望んでも、なかなか産まれにくい。これは長寿のせいやら何やらと言う者もいるがな。竜族は子孫を残せず焦っていた。しかしある時、転機が訪れた。一体の竜が、子供を連れて帰ってきたのだ。その子供は人型だったけれど、身に宿す力は間違いないく竜であった」

王様の言葉に耳を傾ける。

知らなくてはいけないと、気付いたから。ただ自分の殻に閉じこもって拒絶するよりも、実りあることだから。

「その竜は、森で出会った人族との間に子が出来た、といったそう。その頃は、まだ私は生まれてなくてな、伝聞でしかないがそう伝わっている。これに望みを繋ごうとした他の竜は、手当たり次第に人族と交わったが、やはり子は出来にくかった。そこで彼らは、森に居る人族だけが子を産む、ということを学んだ。逆も然りでな、森に居る人族も、竜族との間にしか子供を授かることが出来ないと知った」

「人族同士なのですか？」

「そうだ。どういう摂理かは解らない。だが、その事実がはつきりとなるにつれ、その一部の人族たちは竜人族と呼ばれるようになって。竜でもない人でもない、間の子の存在とされた」

「間の子……」

俯いて自分の手を見つめる。指先を握ったり開いたりさせた。両親と私と、何がどう違うのか。

「昔は大勢いたそう。しかし時を重ねるごとに、竜族と同じ様に激滅している。今では竜族と竜人、同じ時期に産まれた者同士が番いになるように、半ば強制だな。そういう風潮になってしまった。シルヴェストは少し思い込みが激しい所があつての、自分はお損ないだと思ってる」

「りゅうじん、が居なかったから」

「そう。だから、君という存在を異なる世界に見つけた時は、熱を

出して何度も倒れたものだ。よほど嬉しかったのである。「
王様はその時の光景を思い出したのか、大きく笑っては方を揺らし
た。」

死ななければならぬ事もある。シルヴェスト殿下という人を知ら
なければならぬ、けれど……。
秋君、私はどうしたらいいの？

兆し

私は未だに、あつちに帰りたいたい、と思っている。その手段も考えてはいる。ポイントは『速度』と『自力』だ。

ならば『走り』でも、世界を渡ることは可能ではなかるうか。種目でいったら短距離走、スタートダッシュが鍵を握る走法。

問題は、『強制的に閉めた』と言っていたこと。完全なる封印を施してしまったのかは分らない。開き方も分らない。りゅうじんという種族は、魔法を扱えるのだろうか。

幸運にも封印を解除し、あつちに渡れてとして、誰がつなぎ目を閉じる？ 開いたまま？

それはいけない。だけど時間の流れが違うから、あつという間にお婆ちゃんになるかもしれない。

わお、本当のタロ子だつ。

そうしたら、誰も見向きもしないだろう。だって、子供を宿すことが出来ない。

うん、それいいな。家庭教師にそれとなく魔法の概念を聞いてみよう。

そう思っていた矢先に、先生が交代してしまった。立て続けに三人も。

ゴライアス批判をした翌日には交代劇が収まっている様なので、侍女さん辺りに密告者でもいるんだろう。もしくは、この部屋全体に何らかの魔法が掛かっている、盗聴できる仕組みになっているか。

だから、クビになりたくなければ彼の人の話をするなど、新しい先生に耳打ちした。

これも、しっかりと盗聴されているのかな。

殿下とゴライアス、折り合いが悪そうだったから、少し安心したのが間違いだつた。

全部筒抜けですよ、殿下。

そんなこんなで、数日が過ぎた。

たったの数日とおもっていたけれど、されど数日。

結婚式まで、あと半分以上はあるけど、半分も無いらしい。

表現方法がよく分らないけど、一ヶ月ぐらいは余裕があるんだろう、きっと。

時間の計り方とかも教わったけど、ついで理解できなかった。理解したくないという気持ちの手伝いもあつたけど。

近頃は、結婚式にむけて所作の勉強をしている。

これもしたくはないんだけど、他にやる事が無いからしょうがない。いや、しょうがなくなる。魔法概論は諦めていないぞ。

宮中所作を一通り覚えたら、殿下の妹君に合わせてくれない。完璧に覚えられることが出来たご褒美というか、テストも含まれていない言方だった。

それを告げたのは先生ではなく、ある一人の侍女さんだった。

たぶん、この人が密告者だと思う。ばれない様に取り繕ってはいるけれども、侍女さんばれんです。妹君の話は殿下が直に私に言うはずだ。

この侍女さんが使えないのか、ゴライアスを神経質なまでに警戒する相手ではないのか。

ゴライアスがどの様な人物かは知らないけれど、彼が送り込んだ人材とは到底思えない。まあ、似たような思考の持ち主、それもゴライアスより劣る頭脳な人が送り込んだんだろう。

そう納得しておくことにした。

取り除かれる心

所作の授業。

段々と様になってきている、と先生に褒められた。侍女さん達にも褒められた。

素直に嬉しいと思う。これって馴染んできちゃっているのかな。

密告侍女にはだめだしされたけど、侍女頭さんが怒り心頭な様子で、部屋の外に引っ張っていった。

鉄拳制裁かな、お給料減額かな。それとも、部屋付侍女から追放かな。

気分とは乗るもので、お花を取り寄せるように頼んでみた。その日のうちに色とりどりな花が届き、花瓶や鉢、底の浅い器なども手配してもらおう。さすがに剣山は無いだろうと思って、木材の切れ端と釘とトンカチもお願いした。

部屋の中でトンカチ片手に即席の剣山を作っていたら、侍女さんの激しい抵抗に合い取り上げられてしまった。

よくよく考えたら、人前でトンカチを振り回すのは危険だと思い至る。なんとか説得して返してもらったけど、これからはバルコニーでやるう。侍女さんに怪我をさせてしまつては大変だ。

あ、スポンジという手もあった。あるかなスポンジっぽいもの、聞いてみよう。

壺の様な大きめの花瓶に、花を生けた。

あつちで扱っていたような花はないけれど、手慰めにしては妥当な出来栄えだろう。

これに喜んだ侍女さん達が、世界中の花をかき集めると意気込んでいた。明日が無理でも、近日中には、必ず届けさせると張り切っていた。恐るべし、侍女さんパワー。

もし、スポンジが見つかったら、アレンジメントで小振りなものを

作ってプレゼントしよう。
喜んでくれると良いな。

殿下が訪れ、城内を案内すると連れ出された。

軽い探検気分だよ、と背負ったりリュックの中身を見せてくれた。お菓子和水筒とカップ、敷物が詰め込まれていた。

聖堂のような大広間や壁一面の書棚に本が詰め込まれた図書館、厨房、いろんな所を見て回る。

「こういう風に誰かの案内をしていると、僕も普段入れない場所まで通してくれるんだ」

私だけではなく、殿下も楽しまれている様子で、悪戯っ子の様に微笑んでいる。

そろそろお茶にしよう、と殿下は回廊を外れて、芝生の上に降り立った。

「ここは第三中庭。田園風景を模して造られたんだ。細いんだけど小川となだらかに積み上げた丘。この前行った丘に似ているでしょ？」

敷物を広げて、お茶を注ぎあい、お菓子を半分に分け合って話に興じる。

なるべくこっちの世界についての話題を選んで会話を続ける。たまに殿下は、向こうの暮らしぶりについて聞きたがる素振りを見せ、唸るように言葉を詰まらせていたけど気付かない振りをした。

「まあ、お兄様。この様なところに居りましたのね、探しましたわ。ゴライアスが、お兄様に謁見を申し込んでいましたわ。さあ、わたしと共においでくださいませ」

煌びやかな女性が現れる。お兄様、というぐらいだから、ひよっと

しなくても妹君なのだろう。

殿下の透けるような白髪とは違い、曇りの無い綺麗な金髪を結い上げている。瞳の色は、殿下と同じく緑色だ。

その目が、私を憎憎しげに睨んだ。

誇りと慈愛

妹君と始めてお会いしたというのに、なぜこんなにも憎悪に染まった眼で私を見るのだろうか。

睨み返すのも失礼だし、さり気なく視線を外す。その先には副団長がいて、妹君と同じ様に私を睨みつけていた。副団長には睨み返してやった。

「噂には聞いていたけれど、ほんとうに黒なのね。卑しき竜人、わたくしに挨拶はなくて？」

「デイクシー。黒は、全てを受けとめてくれる慈愛の色だよ。卑しいなんて、そんな言葉を使っではいけない」

「お兄様。わたくし達は、人族と営みを共にしているのです。黒が慈愛だなんて、許されません。お兄様の御髪のように、白だけが誇りと誠実と愛を象徴するのですわ。いえ、しなければなりません。なぜなら、はるか昔にその道を選び取ったのですから」

「デイクシー」

「さあ、このわたくしに挨拶をしなさい」

あの王様に育てられた筈なのに、この温度差はどうしたことか。想像出来ないほどに考え方が違う。殿下が優しく諭している黒というのは、竜としての考え方だろうとは思う。だけど、妹君は、人族よりの考え方なのだろうか。

そうだ、前にも忌々しいと言われたことがある。あれと似ている。

「いつまで黙っているの、はやくしなさい」

妹君が声を荒立てて詰め寄ってきた。だけれども、この城に連れてこられた時の様に無言を貫く。

「礼儀を知らないようね、シェリー。異界の出となれば、無知なのも仕方ないのかしら。それとも、異界の住人すべてが粗野なのかしら？ お前が今日まで過ごしたという異界は、稀に見る低脳ぶりね」

ばちんっ

スローモーション映像と音声の様に、鈍い音が聞こえた。大きく響かせる為に空気を含ませた音ではなく、確実に損傷を負わせる音。同時に、手の平が痛くなつた。

でも、そんなことはどうでもいい。
私のことなんて、どうでも、いい。

「まって、やめるんだ！」

殿下が、私と妹君の間に割ってはいる。

「デイクシー、口が過ぎるぞ！ 彼女は私の花嫁だ。私は竜族で、竜族の教えに従う権利がある。お前の人族に歩み寄ろうとしている姿勢は立派だ。しかし、黒だというだけで、私の花嫁とその家族や知人を愚弄するなら、私は許さない」

「お兄様っ。そんな、わたくしは……っ」

殿下の一つに結わえた髪の毛が、燃えるような真っ赤に見える。妹君の悲痛な声が聞こえてきた。頬を叩かれたことより、思いもよらぬ絶縁の予告が衝撃的なのであろう。強気だった声音が、すすり泣きに変わっていく。

「副団長、ゴライアスとの面会は断る。また後日にしてくれ。デイクシーを連れて下がれ」

殿下の声も、心地良い優しさから硬質なものへと変わっていた。

「いいえ、殿下。その娘を、侮辱罪並びに不敬罪、及び暴行罪で連行いたします」

「何を言うか」

「デイクシー様に働いた所業は、間違いなく暴行であります。我々騎士団は、王族と国民の守護を約束しております。その娘は、王族に対し二度も無礼を犯した」

背中が強張る。私を護るように、じりじりと後退する。

「拘束しろ」

いつの間にやら集まっていた団員達は、殿下には丁重に、私には荒々しい態度で掴みかかった。

さよなら

此処は、地下の牢屋。

私は　　、なんだっけ。

おかしたつみは、ぶじよく罪とふけい罪とぼーこー罪とはんぎやく罪。

はんぎやく罪は、ええとあとから追加されたのかな。わかんないや。ご飯は、何時間かごとに一回だけ。そのかわり山盛りのおかずと薄切りにされたパン、それにスープが届くの。それをたくさんのおかずの時間をかけて食べる。

おかずとスープはね、すごい匂いがするの。パクチーとかハーブのような、それ以上かも。でも、それを食べないとぶたれるし、食器を下げてもくれない。

ときどき女の人が、お湯を入れた桶と手拭いをもって来るの。身体を拭ってくれる。あつたかくとても気持ち良い。楽しみといったら、それだけ。こんどはいつ来るのかな。

ああ、そうだ。

私、お仕事しに来たんだった。お仕事はせいこうしたのかな。とりもどせって、いわれたの。

連れ戻せ、じゃなかったわ。

お仕事、がんばれたかな。

ここはとても静かで、寒い。

みんながいるところに行きたいな。

「……つぶ、ひつく……」

秋君、ここはとても寒いよ。

「出る」

男の人かな、低い声が聞こえる。

私、ここからでもいいの？　ここをでたらどこに行くの、おうちにかえられる？

「連れて行け」

おうちじゃないのね。

ああ、人がいっぱいいる。うれしい。

「さあ、私の手をおとり下さい。湯殿に参ります。綺麗にしましよ
うね」

お風呂には入れたの。泡がぶくぶくして、たのしかったわ。

でもね、お風呂なのにご飯と同じ匂いがしたのよ。どうしてなのか

な。

「忌々しい娘。今日から私が、貴様の身を預かることになった。式が行われる日まで、この部屋から一步も出るな」

私、あなた知ってる。ほんとうよ、しっているの。でも、おとうさんかおじさんか分らない。

「ふん、薬草は効いているようだな」

いや、たたかないで。良い子にしているから。

「貴方、そう毎回繰り返していると痣になりますわ」

「薬草の量を増やしておけ」

「旦那様、これ以上は何卒ご勘弁下さいまし。身籠られたときに、御子様にも母体にも影響がでてしまいます」

「それは好都合。黒など要らぬ」

「旦那様……」

「お体をお拭き致します」
「なんで？」

「明日、殿下がお見えになられます」
「でんか。でんか、ってだれだろう？ あき君かな。
そうだ、あき君だ。うれしいな、あいに来てくれる。」

「久しぶりだね。具合が悪いつて聞いたのだけれど、大丈夫かい？」
「だあれ、この男の人。あき君じゃないよ。」

「あのね、あれからずっと名前を考えていたんだ。変な名前じゃなく
くてね、正式に名乗れる名前だよ」

「私のなまえ？」

「わたしのなまえは」

「シャイン」

「なまえは」

「君には、輝いてほしいから。君の笑顔がとても輝いていたから、
だから、シャイン」

『ひなた』

「あれ？ どうして、泣いているの？」

「泣かないで。幸せにするから」

『泣かないで。常に顔を上げ、笑っていなさい。その笑顔の分だけ、
樋口夫妻も私も幸せになれます』

「シャイン。やわらかな陽光の子」

『ひなた、貴女があたたかな場所をつくるのです』

だれ だろう
わたし 知っているのに
どこに 行って しまったの

私

ねえ、みて。あそこにきれいな花嫁さんがいるわ。

真白なドレスがとても綺麗よ。

髪の毛は結んでいるのね。あたまの飾り布の中に隠しちゃって見えないの。

ああ、でも殿下のお嫁さんだもの、きっと綺麗な色なんだわ。もったいないな。殿下も喜んでくれたのに。

「髪の毛も結び上げてしまったのか。勿体無い事だ、あんなに艶やかな黒だというのに」

「お父様」

「デイクシー、お前の相手も黒色ではないか。何故そんなに忌み嫌う」

「黒だからですわ。わたくし達一族は、他の者を振り切つてまで、人族と歩むと決めた。決めたからには薄めなくてはならない」

「白は、何色にも染まってしまうぞ」

「……いいえ、染まりません。絶対に」

絵本のような、きれいなお姫様なのに。

泣かないで、わたし、笑うから。

みんなのために、わらうから。

だって、だって、あたたかいものなんだから。そうなれって、いつていた。

「何がおかしいっ」

「デイクシー!!」

「放して、お父様。この娘が……っ」

「連れて行けっ。式の出席を禁ずる」

どうしよう、おこらせちゃったの。
わたし、ここにいたらいけない？

「綺麗だよ、シャイン」

でんか、どこかに行くの？ よそ行きのお洋服みたいね。

「シャイン？」

なあに？

「まだ気分が優れないようだね。式と広場での披露だけは我慢してくれないか。そのあとの宴には出なくてもいいから」

そんなことないわ、げんきよ。

「シャイン……？」

ねえ、あの匂い袋はどこにあるのかしら？ あれがないと気持ち悪くなるの。いつも、紐に通して首から提げていたのよ。厄除けも兼ねているんだって。

どこにやってしまったのかしら。小父様を探してもらわないと。あれがないと、ぶたれてしまうから。

リン ドーン

あたまのおくで、何かが鳴り響く。
此処は、どこだっけ。だい……せい……。
おもいだした、だいせいどう、だ。

カラン カラン

なせ、ここににいるのかしら。
いつ、ここに来た？ ここに住みはじめて、何日たった？
もう、さんかげつめ？

キーン コーン

たくさん鐘がならされている。

これは、祝福の鐘よね。だって、結婚式だもの。

ねえ、しってる？ 鐘の音って、厄払いや邪気払いも出来るのよ。

大小様々な鐘の音色が響いているんだもの、みんなの厄除けにもなるわ。とても良いことね。

「シャイン、見てご覧。国中の者達が、この広場に集まっている。

皆、僕達のことを祝福してくれているんだよ」

「ええ、殿下」

「大丈夫？ あんまり無理しないでね。まだ病み上がりなんだから」
鐘の音色が体中に振動を与え、意識を急速に覚醒させる。

眼下に広がる人の群れ。その大半の視線が、バルコニーにいるわたし達を、仰ぎ見ている。

「シャイン、手を振ってあげて。民の声に応えてあげよう」

言われるがままに観衆に向かって手を振ると、一際大きく歓声があがった。

もう三ヶ月経ってしまったのね。

わたし、その間は何をしていたのかな。

おしごとは？ たしか、何事もなく終わったんだっけ。じゃあ、あとは帰るだけね。早く帰らないと叔父さんと叔母さんがしんぱいする。

どうしたら、帰ることができるかな。本当に帰れるかしら。

たくさんのおすりを食べたから、身体がよごれているかもしれない。汚れていると、あの人に好きになってももらえないかも。

「だめ。そんなの、だめ」

「シャイン、なにがだめなの？」

そうだ、せめてこの気持ちだけでも。

からだがきらわれても、きもちだけならすきっていつてくれるかな。ここはつらい。わたしが生きる場所じゃない。

このバルコニーからでも帰れるかな。落ちたら、重たいからスピードができるかも。

「……っは」

ここに、わたしのいばしよはないの。

「くふ………かはっ」

だから、つらぬいて、そのさきへ。

わたしもがんばるから。だから、わたしのかたな、とちゅうで……

おれ……りきえ……し……えね。

い……しき……たもた……な、いと。いた……な……てないんあ……

……かあ……

「シャインー！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5546y/>

あっちとこっち

2011年12月11日04時12分発行